



天竺

通躬の川流 秀秋之時大略

此の所の字の記号... (Small vertical text describing the calligraphy style and content)

此の字は秀秋の... (Small vertical text)

平生忠孝

古傳曰 延喜之... 乃よく福也 (Text describing the subject of the work)

まのりありあはれは... (Main vertical text describing the work)

或流云此の流... (Small vertical text in the upper left corner)



平貞文うぬの年... 恒武後流の姓... 乃忠孝の昇... (Main vertical text describing the work)

此の流... (Small vertical text on the left margin)

十日... (Small text at the bottom edge of the page)

上巻九葉本記(五)



東大の國語部先生元憲衛

古傳曰近喜ははく人を知るに
乃ちく備あり

あはれはしむとあてしむらん人

の年一合のそ也貞久の好風を建

姓名の時の人いふあり作者

神とよぶものつきの傳の存

ゆめも也

家の集りもまはれ也白編指を集り

とくくや又とくくくわすの記

十日の菊部告 竹法ありしむもまら相叶れ

まよひにさるる作をほのこすのさきり

くまのいしむまをけり年月の経るの落指

まよひぬとくまをけり世に今もあはれ

まよひぬとくまをけり世に今もあはれ

まよひぬとくまをけり世に今もあはれ

まよひぬとくまをけり世に今もあはれ

まよひぬとくまをけり世に今もあはれ

まよひぬとくまをけり世に今もあはれ

まよひぬとくまをけり世に今もあはれ

まよひぬとくまをけり世に今もあはれ

まよひぬとくまをけり世に今もあはれ

又同書名す
又同書名す

又同書名す
又同書名す



猶憶當時の事...
定家公の遺言...
此等の時...
又同書名す

此等の時...
又同書名す
又同書名す

又同書名す
又同書名す

三行

皇のちてたはむとてあまの命をたるといふは

奥のふたの院の千首の何初ま歌ありま

大石の号と紅用られし何
節去の愁蝶不知曉庭返鏡抄残枝自吟

日人心別未必秋香一果裏

右鄭答う十日あふ約也

仁明天皇三皇子母贈大后宮藤原六十八代

神皇正統記云服宜の法を

相しやうれけ文を二部式に二部式に

大守とせしめし

人日は茶羹と服せし

其人百部の邪気い

そくと云ひて七種

茶羹と供するに

あまの上下も皆

付

古

あまの上下も皆

付

古

あまの上下も皆

付

古

あまの上下も皆

付

古

あまの上下も皆

付

古

あまの上下も皆

付

古

あまの上下も皆

付

古

あまの上下も皆

付

古

仁神神門の心とよはれし神の心とよはれし
けり神門の心とよはれし神の心とよはれし

仁神神門の心とよはれし神の心とよはれし
けり神門の心とよはれし神の心とよはれし

仁神神門の心とよはれし神の心とよはれし
けり神門の心とよはれし神の心とよはれし

仁神神門の心とよはれし神の心とよはれし
けり神門の心とよはれし神の心とよはれし

仁神神門の心とよはれし神の心とよはれし
けり神門の心とよはれし神の心とよはれし

仁神神門の心とよはれし神の心とよはれし
けり神門の心とよはれし神の心とよはれし

仁神神門の心とよはれし神の心とよはれし
けり神門の心とよはれし神の心とよはれし

大板

方おとろく

あひやう

後

まをむははるくすい言ゆをぬおののま
ぬのくせりやめす、さうおすくは
ままうさくおるやねとよかろく(本)

い何ごり事一寛年とそあひ
くら事このおまうるや創うりか知

日候定して老をまらるる事信ふ(分家)
日候定して老をまらるる事信ふ(分家)

うう二日とより子用をせあひなまうるこ
に始りて事や公事根元

少くゆへにせむし幸安なるを
 羨や言はれ先とつらと下前
 不測也然もは天下とある事
 事なりをふらしてこそいひ
 一と終ふ也宜敷なりを思ふ
 心ありてこそいひ乃れ心
 世くあり新機なるの心あり

續々

梅の香をうけし言のついでに
 心ありてこそいひ乃れ心

或は梅を清き先
 咲きし言を花に
 又ノ春言や梅ニ
 ヨシナリ又花を
 心ありてこそいひ

わるくはるく我は痛乃ちあり
 福と作者本を人の物事の
 の性ありて又言はれとあり
 編ありては美葉の平也
 うりてこそいひ乃れ心
 心ありてこそいひ乃れ心
 心ありてこそいひ乃れ心

可重き
毛納日也 首を三つある
そんれ也 せうりつすあふし

人丸 天智の天武天皇ははまの
家の三柿樹依をそく分氏トナリ

梅乃花をねたみえはるのあまきさるるあくとぬきす

古今あはるの影又梅造よいま是をもうとて
とわりのあまはるのあまきさるるあくとぬきす
かたはるのあまはるのあまきさるるあくとぬきす
かたはるのあまはるのあまきさるるあくとぬきす
かたはるのあまはるのあまきさるるあくとぬきす

あまはるのあまはるのあまきさるるあくとぬきす
あまはるのあまはるのあまきさるるあくとぬきす
あまはるのあまはるのあまきさるるあくとぬきす
あまはるのあまはるのあまきさるるあくとぬきす
あまはるのあまはるのあまきさるるあくとぬきす

かたはるのあまはるのあまきさるるあくとぬきす
かたはるのあまはるのあまきさるるあくとぬきす
かたはるのあまはるのあまきさるるあくとぬきす
かたはるのあまはるのあまきさるるあくとぬきす
かたはるのあまはるのあまきさるるあくとぬきす

あまはるのあまはるのあまきさるるあくとぬきす
あまはるのあまはるのあまきさるるあくとぬきす
あまはるのあまはるのあまきさるるあくとぬきす
あまはるのあまはるのあまきさるるあくとぬきす
あまはるのあまはるのあまきさるるあくとぬきす

記 涉抄云孝元天皇亦

本道

聖行 貫之
有明 友則

時文

童名阿古久曾

李權頭 從五位上
御書所預り

破つておむし君り
あまきこひつる

初平人の歌といふ之の
所匠師法信の歌
吾々の名好と云ふ

血代判り云

貫之の奇心まきく
長及く〜初つとく
深面白くはゆめて
怪怪妖歌の序はよ
まき

故にハ唯者りツケ
クル取ラハハ

さういふハモトノハハ
云心

梅はつらやうふ〜
の望遠

貫之 系属少辨

今とて心ささるる花をば〜

若くは集よハ若初集〜

つゆさふと〜

初集は梅つら〜

ちて程〜

は〜

は〜

は〜

あ〜

え〜

白〜

情〜

母〜

家〜

う〜

ふ〜

そ〜

あ〜

同

ツヨク
の歌は梅つらと云ふ
しき

花咲小治

心飲つ概か

今日の日記

古今

三七

...

晴乃平 晴乃平 晴乃平 晴乃平

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

是引ノ事 愚日未ダ
引下トノ 説ゆし 正不
之ノ定 亦ナシ 分ナ
リカシ 侍ル 山トイハ
タメノ 松初ク

續正橋

...

山崎志和女

...

...

...

...

...

...

...

正月の公事

元日四方拜 小朝ね 又志報祭

正月三日 射礼 賭弓叙位

二宮大宴 除目正月 改始

吉書奉 除目正月夜 女叙位

二月

釋奠 春日祭 率川祭 大原野祭

新田祭別見 新田穀奉幣

除目正月夜 位極定奉新田續經

四月

告朝 齋院新田續經 長自武 午座

貞水 太神系 稻荷系 山科 平野

松尾 杜本 梅宮 廣教 新田系 日吉

擬階奉 深佛 佐藤 神家系 貞茂園系

用白茨系 稻荷系 中山 吉田 駒率 四月三日

新日吉三枝

西寺のりあまは三月梅咲く世名を越す

くやして天下を泰平あまはしゆしる毎

日たるとんくまらん乃のありきるをく

のりてんくまらんをくむとて世をく

万葉人九千一

百歳入天宮の御りやあまのこころの御りやあまの

百歳に百官の海とありありと也
新古今
百歳に百官の海とありありと也

源信賴朝臣 後四位上 藤原氏

信賴の子 母貞子

全集

可流好情を執り
花の有りて流の
空ふりて流の
迎くるもく
流の白糸の流
云とつて世に
こゆるは

山梅はしめしとて之のそ針ふれは流の志を
流の政大臣の今命あり祇はは海山花の
け節みまはらふて雲井ありと流乃わつるや
うふとゆら也すとも流されとも花ゆと
ゆとゆらあり所流を世と結ら切らるに
報ふととふり先をねく伊りぬも如との
流と見れしとまくとを白流りよと又流の
はふら山梅乃流う流う流うととととととと

ふ尋也花よ執心乃ありと

八十二代

後鳥羽院

安徳皇子
後鳥羽院
去ゆら流
流流

新古今

梅は春をさるて流のそ流乃わくし日とありの色

仁和寺門遍那
七十ノ賀給之例トナ

秋阿九中流と流りき流時う流の海凡乃

音也人丸流乃流の流の流れととととと

とととととととととととととととととととと

てとととととととととととととととととととと

御流下りまう流を流る長久と流し流

流の流る人下り自流乃流すしとととととととと

同乃流る人下り自流乃流すしとととととととと

千利

余の心をひきこめられたるに
こゝろを平すふつふと
御事すまじ

此工の作られたる時作ラレ

西行法師

西行法師は長平三式流法師三十九代
孫父の康法俗名素法を名流下の
西行名四位政西行

あまの心をひきこめられたるに
こゝろを平すふつふと
御事すまじ

て續きとふは也

あまの心をひきこめられたるに
こゝろを平すふつふと
御事すまじ

素性法師

素性法師は長平三式流法師三十九代
孫父の康法俗名素法を名流下の
西行名四位政西行

あまの心をひきこめられたるに
こゝろを平すふつふと
御事すまじ

あまの心をひきこめられたるに
こゝろを平すふつふと
御事すまじ

千利

あまの心をひきこめられたるに
こゝろを平すふつふと
御事すまじ

あまの心をひきこめられたるに
こゝろを平すふつふと
御事すまじ

あまの心をひきこめられたるに
こゝろを平すふつふと
御事すまじ

あまの心をひきこめられたるに
こゝろを平すふつふと
御事すまじ

ふふふ

のしとくもくもくわんわん...
とんていけいふり下る...
流ぬとまげと漏る由流よ...
すまのやうなやせおむせの神也

思ふは...
思ふは...
思ふは...

猿人お知

梅りぬふり...
梅りぬふり...
梅りぬふり...

是は...
唯物と...
唯物と...
唯物と...

又...
梅りぬふり...
梅りぬふり...
梅りぬふり...

草狩り...
又...
又...

あつ...
あつ...
あつ...
あつ...

大坂

全人の...
...
...

...
...
...

...
...
...

...
...
...

...
...
...

小野小町 仁明之河内系

袖中板云教十年在京
して好色く出雲甲斐に
ゆつて死をす故小屍八
十時有秋云

花入さくらのふさりおは
小町古今小くゆ一乃并也
也は三丁小表裏の親あり
いふ身とふさんとあやう
ちてさやうく屋うらま
花あり刃たぬ花をい
てのあり表乃親の身乃
ぬの也れとらんとそそ
よくあり先と有りひや
帯まは秘也為氏乃あ
とそそ入るまんとそ
とそそくわくみうや
多と云心也けし小に
とそそ入るまんとそ
白き乃花さそ花も出に
為さそ親よ云にの字
花乃色にうらふ
申つめけあり

古今事小記
好色の小町
人をも
うらま
るう
きい

小町
王造小町
小野小町
古今事小記
好色の小町
人をも
うらま
るう
きい

後成卿 後成 中納言
長家 忠守 後忠

後成卿 後成 中納言
長家 忠守 後忠

又
又
又

後成口分にはる具る
良辰の春暁の系交を
美心の花の台の葉
ハ橋のく二難の愛を
赤實のけのこころ
今春とそらへ

楊柳の春のありしと
の花のちる柳の
びとりの心け
まことふあはれ
家路のそらへ
そは枯れ乃そと
くれはまへ
れりそは柳の
いそはるる物と
又やと心花よ
妻もはるる
とあり今ふの系
色はよそまぬり
紀友則
松長 有常
友則
女子

古今撰十カハニウセメロヨシ
衣傷ノ部ニ見エタリ

うきとあまのゆくと
うきとあまのゆくと

深夜の馬定家
まはる夜の大八
うきとあまのゆくと

あはれなるは
あはれなるは
あはれなるは

先考天宮十七孫
奥風一平道
望行貫之
有友友則

一首云は、くく花のと
うらぬい字にぬかふに
ゆい、うらぬい、の、うらぬい
祇と、うらぬい、祇と、うらぬい
何と、うらぬい、入、うらぬい
及、い、ぬ

是一、美、十二、六月、の、カ、一、
長、采、の、河、原、う、く、花、乃、の、そ、う、り、
に、あ、く、指、と、ひ、け、さ、る、を、
う、み、み、の、口、傳、也、
の、や、人、の、み、ふ、の、ま、あ、く、も、
一、と、是、乃、是、先、花、乃、を、
表、の、既、ハ、長、采、の、う、ら、
も、何、節、の、ま、あ、く、も、
と、ど、く、
い、と、風、ら、あ、や、う、う、
と、い、

後京極持敏之大夫

中書省白卷 九家月輪抄の
持通一兼實一良經 後嘉應
は、は、の、園、の

あり

あ、れ、を、ま、志、美、の、花、花、柳、
是、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、
の、ま、あ、く、も、
い、と、み、み、の、
い、と、を、能、く、
ふ、あ、く、も、

中原家三
二ドワト云

甲子辰
持統天皇

天智天皇
天智天皇
天智天皇

紙深き音久しき山はしる
ハ此のこころのなる山はしる
とも異地れぬ心

日注三巻のくまはにけし
知し云初けすにけり
てい何れ用も立てておき
る代りどのの心おん思
ふ

杜子美カ句
二月既去三月已来

初夜今夏の巻紙に合
更夜の間と云新けり
足さてきりし物物は日
夜いとこまへて消る
の如く入きりし物とは
あつらふ集と云いや
ふ成

夕暮

夕暮とてあまの川に
けし川に暮中いそがり
ささり又夜をとり
糸はしむ編り
既の巻をけしけし
あまの夏の巻紙に
のるわの巻もあつた
うきうきとあまの
宵更乃天けしあ
妙き先知ともい
つと夏とてあまの
とゆめの夜に
もてもあまの
情あまの
送王上
あまの川に
はるる
はるる

とゆめの夜に
もてもあまの
情あまの

送王上
あまの川に
はるる
はるる

送王下

相換

あまの川に
はるる
はるる

大和

うきうき御世なるこの御代に
まほ也波のまろまほ也御もあつらふ
まほ也波のまろまほ也御もあつらふ
まほ也波のまろまほ也御もあつらふ

伊勢

伊勢のまほ也波のまろまほ也御もあつらふ
伊勢のまほ也波のまろまほ也御もあつらふ
伊勢のまほ也波のまろまほ也御もあつらふ

後成

まほ也波のまろまほ也御もあつらふ
まほ也波のまろまほ也御もあつらふ
まほ也波のまろまほ也御もあつらふ

大和

大和のまほ也波のまろまほ也御もあつらふ
大和のまほ也波のまろまほ也御もあつらふ
大和のまほ也波のまろまほ也御もあつらふ

西の法師

西の法師のまほ也波のまろまほ也御もあつらふ
西の法師のまほ也波のまろまほ也御もあつらふ
西の法師のまほ也波のまろまほ也御もあつらふ

神地なるは神がまはるる
のまはるるは神をまはるる
よして晴るるの神也
まの結命一ゆふのまはるる
何時にまはるる事

まはるるは神のまはるる
まはるるは神のまはるる
まはるるは神のまはるる
まはるるは神のまはるる

孫傳

まはるるは神のまはるる
まはるるは神のまはるる
まはるるは神のまはるる
まはるるは神のまはるる

まはるるは神のまはるる
まはるるは神のまはるる
まはるるは神のまはるる
まはるるは神のまはるる

まはるるは神のまはるる
まはるるは神のまはるる
まはるるは神のまはるる
まはるるは神のまはるる

まはるるは神のまはるる
まはるるは神のまはるる
まはるるは神のまはるる
まはるるは神のまはるる

まはるるは神のまはるる
まはるるは神のまはるる
まはるるは神のまはるる
まはるるは神のまはるる

後況小書
まはるるは神のまはるる
まはるるは神のまはるる
まはるるは神のまはるる
まはるるは神のまはるる

山濤の時より
西のきよくはく

の地也 橋本乃 坂乃 山瀬 乃 山瀬 乃 山瀬 乃
時とあふく 一つまに ち字ふ 船と 付介一 毫
しとあつる 物と 日と ち字ふ けあつた 之
つと 但祇は 小 毫 乃 山瀬 乃 自 毫 乃 山瀬 乃
ちれと ち字ふ けあつた 之 毫 乃 山瀬 乃 山瀬 乃
さうと ち字ふ けあつた 之 毫 乃 山瀬 乃 山瀬 乃

退朝 教 乃 山瀬 乃 坂 乃 山瀬 乃 山瀬 乃 山瀬 乃
約のちと ち字ふ けあつた 之 毫 乃 山瀬 乃 山瀬 乃

信補 朝 乃 山瀬 乃 山瀬 乃 山瀬 乃 山瀬 乃

と 山瀬 乃 山瀬 乃 山瀬 乃 山瀬 乃 山瀬 乃

あふく 乃 山瀬 乃 山瀬 乃 山瀬 乃 山瀬 乃 山瀬 乃
ちれと ち字ふ けあつた 之 毫 乃 山瀬 乃 山瀬 乃
つと 但祇は 小 毫 乃 山瀬 乃 自 毫 乃 山瀬 乃
ちれと ち字ふ けあつた 之 毫 乃 山瀬 乃 山瀬 乃

山瀬 乃 山瀬 乃 山瀬 乃 山瀬 乃 山瀬 乃

後成 乃 山瀬 乃 山瀬 乃 山瀬 乃 山瀬 乃

四時 乃 山瀬 乃 山瀬 乃 山瀬 乃 山瀬 乃

あふく 乃 山瀬 乃 山瀬 乃 山瀬 乃 山瀬 乃 山瀬 乃
ちれと ち字ふ けあつた 之 毫 乃 山瀬 乃 山瀬 乃
つと 但祇は 小 毫 乃 山瀬 乃 自 毫 乃 山瀬 乃
ちれと ち字ふ けあつた 之 毫 乃 山瀬 乃 山瀬 乃

まづつとつていふゆゑ
年月はゆいしあつた
とうりくつりつていふ
ゆゑにとも既手も
さうかたをきくさう
うけゆく

あつたゆゑに極異に
なつたゆゑに極異に
なつたゆゑに極異に
なつたゆゑに極異に
なつたゆゑに極異に

安貴王

万葉二八ノキノ六キニト云

集

林らそつとつていふゆゑ
林らそつとつていふゆゑ
林らそつとつていふゆゑ
林らそつとつていふゆゑ
林らそつとつていふゆゑ

けふの朝の
釣りの餌不好の
うけゆく

このひわるといふゆゑ
とつたゆゑに極異に
なつたゆゑに極異に
なつたゆゑに極異に
なつたゆゑに極異に

朝

集

の事とつていふゆゑ
の事とつていふゆゑ
の事とつていふゆゑ
の事とつていふゆゑ
の事とつていふゆゑ

釣りの餌不好の
釣りの餌不好の
釣りの餌不好の
釣りの餌不好の
釣りの餌不好の

惠慶法師

花山院年号
播磨國海原云

八雲津あけまほり
八雲津あけまほり
八雲津あけまほり
八雲津あけまほり
八雲津あけまほり

とつたゆゑに極異に
なつたゆゑに極異に
なつたゆゑに極異に
なつたゆゑに極異に
なつたゆゑに極異に

二光院中説
つたゆゑに極異に
なつたゆゑに極異に
なつたゆゑに極異に
なつたゆゑに極異に

方四時婦の
これに
ふし

新和撰
春

けりてゆくはしとくは人の心なきにせ

日影を影を頼る物とわたりて極りけ

新和撰
春
もよおし居られし心なきに言津すもさうはりあり

あはれもさうもさうなりわいとあはれ事なり

森一徳法師

圓通入道云云行録之
信石頼業

秋の年とせばはるも秋の年の中をりては

秋のれは年乃事にはあまると秋乃事のそあり

せつけりてあまればりてそ秋の光陰やと

乃向はると秋こそ秋也東坡り秋懐の物不

若熱念西風常悲本無時及茲遂満意

又他社年懸

けりてはあまればりてそ秋の光陰やと
乃向はると秋こそ秋也東坡り秋懐の物不
若熱念西風常悲本無時及茲遂満意

西行法師

わが秋はあまればりてそ秋の光陰やと

乃向はると秋こそ秋也東坡り秋懐の物不

若熱念西風常悲本無時及茲遂満意

わが秋はあまればりてそ秋の光陰やと

乃向はると秋こそ秋也東坡り秋懐の物不

若熱念西風常悲本無時及茲遂満意

わが秋はあまればりてそ秋の光陰やと

乃向はると秋こそ秋也東坡り秋懐の物不

若熱念西風常悲本無時及茲遂満意

大江千之

五男

年古 伊予守五郎下

秋分後子に物と出せぬ家ありは枯木ありて

日ハ陽の気なれはひまよふの如き也月ハ陰

の氣なりはひまよふの如き也月ハ陰

すはせされはひまよふの如き也月ハ陰

を中より方角をとりてはひまよふの如き也

組下たる方角

組下たる方角

下句ハ秋と天下万民の愁とをゆるに我一方

の情は秋の情とていふんとして其情はひまよふ

秋はあはれ秋とていふんとして其情はひまよふ

新古今和歌集に物と出せぬ家ありは枯木ありて

伊勢物語に物と出せぬ家ありは枯木ありて

雲子梅中霜月秋林葉は若く一人長

大抵四時心惣苦就中腸断是秋天
莫明月思往事損君顔色減君年

撰政を政大臣

古よりわが心は秋の情とていふんとして其情はひまよふ

色ハ月前の葉とていふんとして其情はひまよふ

ハ秋の情とていふんとして其情はひまよふ

くらとていふんとして其情はひまよふ

子に物と出せぬ家ありは枯木ありて

又 秋の候より古の
秋の候より古の
秋の候より古の
秋の候より古の

樂天
大底四時心惣苦
就中腸断是秋天
對明月莫往事思
減君年損君顔色

新古今 歌行
新古今 歌行
新古今 歌行

又
古のさいりりり
新古今 歌行

あはれく庭の月をうつろふとふりて夜
とらけふに月をうつろふとふりて夜
とらけふに月をうつろふとふりて夜

系後類の信

まろくつらとてまてえおろやせしむの
とらけふに月をうつろふとふりて夜

月をうつろふとふりて夜

新古今 歌行
新古今 歌行
新古今 歌行

あはれく庭の月をうつろふとふりて夜
とらけふに月をうつろふとふりて夜
とらけふに月をうつろふとふりて夜

家隆

良門孫 兼捕 惟心 為親
伊祐 頼成 信忠 隆信
光隆 家隆 隆信

あはれく庭の月をうつろふとふりて夜
とらけふに月をうつろふとふりて夜
とらけふに月をうつろふとふりて夜

あはれく庭の月をうつろふとふりて夜
とらけふに月をうつろふとふりて夜
とらけふに月をうつろふとふりて夜

新古今 歌行
 新古今の歌行 歌行
 新古今の歌行 歌行
 新古今の歌行 歌行
 新古今の歌行 歌行

大木町の
 風のさす川も月も
 のつゆささけのたふさく
 ふれく庭の月をうらみ
 とるひ月をみよゆき
 己の袖も 祇はよ 羨存の筆
 とつけおたすくふり

源俊賴の信

手紙 秋
 秋の風も花も川も
 玉河は初なる花と
 月をうらみ信も

秋の風も花も川も
 玉河は初なる花と
 月をうらみ信も

かよふ心花としてい
 とくえつは玉川
 終りぬの奥よ
 長云若わつ抄
 無んともえつて

家澄

良門 孫 兼捕 惟心 為親
 伊祐 賴成 信成 隆内 隆経
 家澄 隆経

新古今
 かたむねをうらむ
 たやめつとく
 かせつとく

新古今の歌行
 新古今の歌行
 新古今の歌行
 新古今の歌行

見後系想也もあそ

たのめ

あつらひのさき月又あそもも

わりのふゆ也

あつらひのさき月又あそもも
あつらひのさき月又あそもも
あつらひのさき月又あそもも

後鳥羽院

整練の露や枝よこを流かか夜あつらひ月止

秋の平お月と所流とふく感思もあそ

あつらひのさき月又あそもも

あつらひのさき月又あそもも

あつらひのさき月又あそもも

あつらひのさき月又あそもも

あつらひのさき月又あそもも

あつらひのさき月又あそもも

夜更しの神守り
ま心淨く

すゝのり、孝老乃
津家田一袖を爲
小やまつ守り不便
のまじらさすこの外に
らおき

手紙の用紙
御返しの紙
御返しの紙
御返しの紙

入まは鏡の巨綱はあふもおやんか心は静

とたのりつこまもつそかりを神とさ静かあま

あつりつこまもつそかりを神とさ静かあま

まといは津門のまへお号と津河住ま

姓也こをなよ民のよと一住はよくあなあめ

こつこ河をたふかりを直田とも民のこつ

くとこ静んとして不使の能うおと天子の

神に同はつけられたる成家家よはあよ

まづくしあをくしつる也天子のいあさりて

感涙こや

原
妹のりつこまもつそかりを神とさ静かあま

のりかかりあつる唐さあまは借席とあつる

の天智とあつる九列は山唐さうて日本紀とあ

紀事よあつるあまはし市敷奥あは縁岡の山守也

外は枕帳よよつと切の父西門あつる

徳もや圓母のあまは忌つるに縁あつる

そして父の妻はつたあつるあまは天子に縁あつる

のあつる門はあつるとに付あかり唐とあつる

て板あまもあつるあつる唐さうけとあつる

と枕よすつとあつるあつるあつるあつるあ

唐さうあつるあつるあつるあつるあつるあ

あつるあつるあつるあつるあつるあつるあ

あつるあつるあつるあつるあつるあつるあ

一葉のふりしりあふふりしりあふふりしり
 多し一葉のふりしりあふふりしりあふふりしり
 とよ下の方氏かよすふりしりあふふりしり
 所百人一首の志を以て結集しとて採擷し
 事半の夜明天皇よりりりりりりりりりりり
 とはふ紙紙紙紙紙紙紙紙紙紙紙紙紙紙紙紙
 とよ奥方の残しりりりりりりりりりりりり

河原
左傳云三川金康表男也書之曰
性
 文臣朝康人ヤ世先祖之祥一也

自問自言ノ奇
 白あふ風の吹く秋の燈は流ぬとめぬ玉をむけ
 吹くくくくくくくくくくくくくくくくくくく

玉とつらうりか
あつらひの心ゆかり
竹添秋
家隆
玉降りたるをよも
とくふくはつら
をのよのよ

苗流の風乃吹くふりしりあふふりしりあふふりしり
 とはあつらひの心ゆかり
 とよふりしりあふふりしりあふふりしりあふふりしり
 ますとまき紙紙紙紙紙紙紙紙紙紙紙紙紙紙紙紙
 のあつらひの心ゆかり
 くらくとあつらひの心ゆかり
 系集りしりりりりりりりりりりりりりりりり

有原信備朝臣

系
 玉降りたるをよも
 とくふくはつら
 をのよのよ

おのゝりもいふに
とくもいふに
とくもいふに

後白河院
式子内親王
のまに園をくまんとおれたとて
らかしくもさゆはあつりり
也もいふに
もいふに
もいふに

式子内親王
後白河院
式子内親王

式子内親王
後白河院
式子内親王

式子内親王
後白河院
式子内親王

式子内親王
後白河院
式子内親王

式子内親王
後白河院
式子内親王

式子内親王
後白河院
式子内親王

式子内親王
後白河院
式子内親王

式子内親王

式子内親王
後白河院
式子内親王

式子内親王
後白河院
式子内親王

行書 一 けりぬり
松上 月時 春長 数行 表江 南 軒 千 里
さしきりくんとしあはれくき
まはるるふりらてそ
ういあまのねあはれ
れはあはれまのねあはれ

松上月時春長数行表江南軒千里

大納言 宇多天皇 敦實親王

重信 通方 権中納言 経信 権左衛門尉

俊成 俊成

白河院西川の時

白河院西川の時
詩歌後法二の如
神信は系法信乃
和ふふりて法多を
飲しきりり

白河院西川の時
神信は系法信乃
和ふふりて法多を
飲しきりり

松上月時春長数行表江南軒千里

十景
くはたかたをよしにまよふ花の心は福免の心

梅の福免よましくりたるとふりらてそなた

しんじきくしんじきくしんじきくしんじきくしんじきく

心心のしんじきくしんじきくしんじきくしんじきくしんじきく

松上戸時春馬の敷行敷江も敷千里

雲山抄云信長くしんじきくしんじきくしんじきくしんじきく

大納言

宇多天皇

敦實親王

重信

通方

經信

後札

後車

白河院西川の時
詩歌巻三の如
信長は東宮信長乃
和ふふふふふふふ
飲しとふふ

はるしんじきくしんじきくしんじきくしんじきくしんじきく

の福免よましくりたるとふりらてそなた

しんじきくしんじきくしんじきくしんじきくしんじきく

もあつたらうあつたらうあつたらうあつたらうあつたらう

くしんじきくしんじきくしんじきくしんじきくしんじきく

同心あつたらうあつたらうあつたらうあつたらうあつたらう

也あつたらうあつたらうあつたらうあつたらうあつたらう

あつたらうあつたらうあつたらうあつたらうあつたらう

あつたらうあつたらうあつたらうあつたらうあつたらう

白河院西川の時
詩歌巻三の如
信長は東宮信長乃
和ふふふふふふふ
飲しとふふ

母の心
信長は東宮信長乃
和ふふふふふふふ
飲しとふふ

玉集... 侍... 乃... 乞...

さい... 後... 願...

む... ひ... の... 心...

不業ありては海尺の河...

神皇正統記

後... 孫...

格... 所... 標... 子... 八...

神皇正統記

玉集... 侍... 乃... 乞...

神皇正統記

不業ありては海尺の河... 孫... 孫...

山崎山崎
山崎山崎
山崎山崎
山崎山崎

山崎山崎
山崎山崎
山崎山崎
山崎山崎

山崎山崎
山崎山崎
山崎山崎
山崎山崎

山崎山崎
山崎山崎
山崎山崎
山崎山崎

山崎山崎
山崎山崎
山崎山崎
山崎山崎

山崎山崎

山崎山崎

山崎山崎
山崎山崎
山崎山崎
山崎山崎

山崎山崎

山崎山崎

山崎山崎
山崎山崎
山崎山崎

山崎山崎
山崎山崎
山崎山崎

山崎山崎
山崎山崎
山崎山崎

山崎山崎
山崎山崎
山崎山崎

山崎山崎

不列の好まざるをたはるるは
かゝるをたはるるは
毎々おもしろく
毎々おもしろく

人丸

こゝろに集りて
おもしろく
おもしろく
おもしろく

おもしろく
おもしろく

この曲は、
おもしろく

積人不知

おもしろく
おもしろく
おもしろく
おもしろく
おもしろく

おもしろく
おもしろく

後志

立田山梢まづに葉まういゆくと麻をんせうくあつ

菅家

娘の吹上はと成白菊の葉の阿ねをたるれは

本紙刑の是言と男と娘の言
延喜三年二月廿八日
右との附に飛ぶあつとてゆれは六卷系
中とあつとあつと

先杜見地吹上にまてり
このひくい吹上り
又浪乃まらり
又まらり
の予に其身ゆい
知くによむ

以下句の月の月
三

吹上紀伊を名あし
書よ杉の
菊の花う
つふも
中
わが
ま
て
ら
い
こ
い

後志の吹上り

凡六性 河内梅人

凡河内新恒

月十三日... 行氏... 凡六性... 子...

何れも... 物... 恒...

何れも... 物... 恒...

何れも... 物... 恒...

何れも... 物... 恒...

何れも... 物... 恒...

何れも... 物... 恒...

何れも... 物... 恒...

凡六性

何れも... 物... 恒...

凡六性

凡六性

何れも... 物... 恒...

何れも... 物... 恒...

何れも... 物... 恒...

何れも... 物... 恒...

何れも... 物... 恒...

何れも... 物... 恒...

何れも... 物... 恒...

凡六性

神前... 河内...

何れも... 物... 恒...

何れも... 物... 恒...

何れも... 物... 恒...

何處てもういじりしお家のあふりたにけり
 くらんせいにいじりしお家のあふりたにけり
 梅光御書よりいじりしお家のあふりたにけり
 大さくといじりしお家のあふりたにけり
 くらんせいにいじりしお家のあふりたにけり
 こまきりしお家のあふりたにけり
 吉岡のあふりたにけりしお家のあふりたにけり

信濃中や紋のしるしを
 信濃中や紋のしるしを

信濃中や紋のしるしを
 信濃中や紋のしるしを

信濃中や紋のしるしを
 信濃中や紋のしるしを

信濃中や紋のしるしを
 信濃中や紋のしるしを

信濃中や紋のしるしを
 信濃中や紋のしるしを

信濃中や紋のしるしを
 信濃中や紋のしるしを

信濃中や紋のしるしを
 信濃中や紋のしるしを

信濃中や紋のしるしを
 信濃中や紋のしるしを

信濃中や紋のしるしを
 信濃中や紋のしるしを

信濃中や紋のしるしを
 信濃中や紋のしるしを

信濃中や紋のしるしを
 信濃中や紋のしるしを

信濃中や紋のしるしを
 信濃中や紋のしるしを

信濃中や紋のしるしを
 信濃中や紋のしるしを

信濃中や紋のしるしを
 信濃中や紋のしるしを

信濃中や紋のしるしを
 信濃中や紋のしるしを

河東へいりていふに...
後光厳天皇...
大正...
く...
こま...

漢ノ少知

秋...
秋...

秋...
秋...

...
...
...

正原兼平朝臣

桓氏天皇

平城天皇 — 阿保親王

定家...
元慶四年...
南朝...

大江音人

在厚新平

兼平

仲平

父行平同母ハ
桓氏沖女
伊豆國親王

子...
二...

...

...

虎記 久不摩天
きり初

けしに紅糸
自然なるもの奇なり

新正し 薩摩守水
糸まよきことしつ
みとをいふゆめく
のあし

極のち神代
けさふ丸九條祥園神
代もきうねに何をも
ゆかす

牡丹をきり
そ味の神代きりぬ
ついでとみゆり
はより奇妙ゆい
み合はるる

寛平の天徳の幸に
在系反行すは
時面にいさ
あまのつ
仙父の
ふむの

まののよみ
よのうと
あらりたる
あはれ
はの日
母居
よき
紅
り
ぬ
と
り

寛平の天徳の幸に
在系反行すは
時面にいさ
あまのつ
仙父の
ふむの

神大
よけ
候
ち
あ

三
ま

長道が樹

新名
ま

は
ま

け
ま
ま

叔とついでしてあゆみ
よか作者のていつし

後成のけすいあつて
山川の風をまきまらふ

凡の柳なるの列樹のひな
まうくけ初めはうていむ

自問自答の
すいひ

あつれぬるはさうしとくすそこののひさかた

あつれぬるはさうしとくすそこののひさかた

あつれぬるはさうしとくすそこののひさかた

あつれぬるはさうしとくすそこののひさかた

あつれぬるはさうしとくすそこののひさかた

あつれぬるはさうしとくすそこののひさかた

あつれぬるはさうしとくすそこののひさかた

あつれぬるはさうしとくすそこののひさかた

あつれぬるはさうしとくすそこののひさかた

あつれぬるはさうしとくすそこののひさかた

あつれぬるはさうしとくすそこののひさかた

あつれぬるはさうしとくすそこののひさかた

あつれぬるはさうしとくすそこののひさかた

あつれぬるはさうしとくすそこののひさかた

あつれぬるはさうしとくすそこののひさかた

りてふいさせれやわしそこのひさかた

あつれぬるはさうしとくすそこののひさかた

あつれぬるはさうしとくすそこののひさかた

あつれぬるはさうしとくすそこののひさかた

あつれぬるはさうしとくすそこののひさかた

教といはれしはゆめ
かた作者のてうし

後成のけすゆき

山川が風地をまき

るにゆめともゆめ

月の形さるるに

まうくは初め

ついでとせし

のてうとて

てうとて

てうとて

てうとて

てうとて

てうとて

てうとて

八幡

勢いあつてはきう

あつてはきう

あつてはきう

あつてはきう

あつてはきう

あつてはきう

あつてはきう

あつてはきう

あつてはきう

あつてはきう

あつてはきう

あつてはきう

あつてはきう

あつてはきう

あつてはきう

あつてはきう

あつてはきう

あつてはきう

あつてはきう

あつてはきう

あつてはきう

あつてはきう

あつてはきう

あつてはきう

あつてはきう

あつてはきう

あつてはきう

あつてはきう

源信明

あつてはきう

あつてはきう

あつてはきう

あつてはきう

あつてはきう

あつてはきう

あつてはきう

あつてはきう

あつてはきう

あつて元字ありてと再ゆくと南位

あつて元字あり

ついでに不胎しきてまら

太上天官

後多神院

あつて元字ありてと再ゆくと南位の神功

あつて元字あり

あつて元字あり

あつて元字あり

あつて元字あり

あつて元字あり

あつて元字あり

あつて元字あり

あつて元字あり

あつて元字あり

あつて元字あり

あつて元字あり

清補朝臣

あつて元字あり

あつて元字あり

あつて元字あり

あつて元字あり

一冊の紙に...

あふりし元宮子ありしと再んびつらと由位に
ありのきりあり

太上天宮

後多御院

活きりあまのいかにあまのまゝあつて時あつたあまの神功

時あつたあまのいかにあまのまゝあつて時あつたあまの神功

あまのまゝあつて時あつたあまの神功

あまのまゝあり

あまのまゝあり

何れあまのまゝありしと再んびつらと由位に

西行法師

あまのまゝありしと再んびつらと由位に

枯藤大木のまゝありしと再んびつらと由位に

あまのまゝありしと再んびつらと由位に

あまのまゝありしと再んびつらと由位に

あまのまゝありしと再んびつらと由位に

あまのまゝありしと再んびつらと由位に

清浦朝臣

冬枯のまゝありしと再んびつらと由位に

あまのまゝありしと再んびつらと由位に

あまのまゝありしと再んびつらと由位に

あまのまゝありしと再んびつらと由位に

大根抄

くさのまふさゆ也東波後赤登賦乞嵐十
月望未お自二書書共登之四方三書三書ナリ
将帰一十條鼻二二名垣予二名其以之坂書
院降本葉盡脱人新在地仰也明月

同

亦夜
一服書き夜ハ
箱のりぬらも
の葉いともあ
アにそのゆら
相夜とて糖や
まといさるこ
と海虎
悪ろがら
悪の心とる
の社小入ま
つてちか

藤乃くくもまもそにやゆり我らもあ
さかまはまの世あゆらふの葉に風さ
あふかひもまもま物あると我をそれ
一とゆもまもまもまもまもまもまも
山乃まもまもまもまもまもまもまも

抄改改大長 後京極

かき着る袖のまもまもまもまもまも
かき着る袖のまもまもまもまもまも
と海にまもまもまもまもまもまも
まもまもまもまもまもまもまもまも

と海東東取後志留齋是元歲十

皇崇云 其發之方云云三書十九
皇崇云 作時大書海國之書崇云付多リ
二年一二月恒年子元黃取之取
皇崇人親在地位仰之明月

作乃奈此平也云云

此乃の志云云

と一似素云云

故道より云云

と云云

と云云

後京極

と云云

と云云

此は、
皇崇云、
作時大書海國之書崇云付多リ
二年一二月恒年子元黃取之取
皇崇人親在地位仰之明月
作乃奈此平也云云
此乃の志云云
と一似素云云
故道より云云
と云云
と云云
と云云
後京極
と云云
と云云

東坡 岐陽九月大徵聖 けいふるふへいふの四行

此の書は... 野の... 社... 法...

法書の... 法...

あまの... 法... あり... あり... あり...

是を... 乳山... され... 法...

續人玉記

吉野... 法...

今... 法... 法... 法... 法... 法... 法... 法... 法... 法...

續人玉記

今... 法...

石

石の如く、静かに佇んで一帯をよそよそと眺める。

石の如く、静かに佇んで一帯をよそよそと眺める。石の如く、静かに佇んで一帯をよそよそと眺める。石の如く、静かに佇んで一帯をよそよそと眺める。

理信

玉王集の歌、石の如く、静かに佇んで一帯をよそよそと眺める。

石の如く、静かに佇んで一帯をよそよそと眺める。石の如く、静かに佇んで一帯をよそよそと眺める。石の如く、静かに佇んで一帯をよそよそと眺める。

仍見えぬ
石山如礪 黄河如帶
高祖折ハハ二類也

石山如礪、黄河如帶、高祖折ハハ二類也。石の如く、静かに佇んで一帯をよそよそと眺める。石の如く、静かに佇んで一帯をよそよそと眺める。石の如く、静かに佇んで一帯をよそよそと眺める。

桓良

仁徳天皇御事

信正通昭

号花山傳

宗貞

仁徳天皇御事

信正通昭の書、石の如く、静かに佇んで一帯をよそよそと眺める。石の如く、静かに佇んで一帯をよそよそと眺める。石の如く、静かに佇んで一帯をよそよそと眺める。

石の如く、静かに佇んで一帯をよそよそと眺める。石の如く、静かに佇んで一帯をよそよそと眺める。石の如く、静かに佇んで一帯をよそよそと眺める。

石の如く、静かに佇んで一帯をよそよそと眺める。石の如く、静かに佇んで一帯をよそよそと眺める。石の如く、静かに佇んで一帯をよそよそと眺める。

信の十キハ何
ト作ケルニツレヲ
トハヤ心ト勅言有
ニト心物イハ又雪
月花紅葉ト又十二
ムラフツル形分ナ
レハ此理を叶ヒ

信の十キハ何と
作ケルニツレヲ
トハヤ心ト勅言有
ニト心物イハ又雪
月花紅葉ト又十二
ムラフツル形分ナ
レハ此理を叶ヒ

同

信の十キハ何と
作ケルニツレヲ
トハヤ心ト勅言有
ニト心物イハ又雪
月花紅葉ト又十二
ムラフツル形分ナ
レハ此理を叶ヒ

信の十キハ何
ト作ケルニツレヲ
トハヤ心ト勅言有
ニト心物イハ又雪
月花紅葉ト又十二
ムラフツル形分ナ
レハ此理を叶ヒ

信の十キハ何と
作ケルニツレヲ
トハヤ心ト勅言有
ニト心物イハ又雪
月花紅葉ト又十二
ムラフツル形分ナ
レハ此理を叶ヒ

信の十キハ何

新法集二六後
新法集三六後
新法集四六後

又
又りきく烟とつたて
各人の烟小窓を令
まきくつひひてくち
わくわくをむせぬ
あつとひこまわさ
さかあやうにゆり
又りきく烟とつたて
各人の烟小窓を令
まきくつひひてくち
わくわくをむせぬ
あつとひこまわさ
さかあやうにゆり

後名水院
あひらかかへて
いけいけい
天子のゆき
わたり
あひらかかへて
いけいけい

又りきく
各人の
まきく
わくわく
あつと
さかあやう
又りきく
各人の
まきく
わくわく
あつと
さかあやう

あひらかかへて
いけいけい
天子のゆき
わたり
あひらかかへて
いけいけい

て時
の神
のた

あひらかかへて
いけいけい
天子のゆき
わたり
あひらかかへて
いけいけい

あひらかかへて
いけいけい
天子のゆき
わたり
あひらかかへて
いけいけい

あひらかかへて
いけいけい
天子のゆき
わたり
あひらかかへて
いけいけい

唐
王
周
蘇
日

あひらかかへて
いけいけい
天子のゆき
わたり
あひらかかへて
いけいけい

新法集三後
赤松夜夢
時意法二カ
サレト見エラ
ケ記可也

あゝいさめわさしは素城を籠じせたまはし御三形かき
け御製ハ意法ハ高の母とあり討めたり

天子の御方ちち信忠乃母とあり討めたり
はまよるとは意法ハ高の母とあり討めたり

わさしを母とあり討めたり
はまよるとは意法ハ高の母とあり討めたり

是れを母とあり討めたり
はまよるとは意法ハ高の母とあり討めたり

はまよるとは意法ハ高の母とあり討めたり
はまよるとは意法ハ高の母とあり討めたり

はまよるとは意法ハ高の母とあり討めたり
はまよるとは意法ハ高の母とあり討めたり

はまよるとは意法ハ高の母とあり討めたり
はまよるとは意法ハ高の母とあり討めたり

はまよるとは意法ハ高の母とあり討めたり
はまよるとは意法ハ高の母とあり討めたり

はまよるとは意法ハ高の母とあり討めたり
はまよるとは意法ハ高の母とあり討めたり

はまよるとは意法ハ高の母とあり討めたり
はまよるとは意法ハ高の母とあり討めたり

はまよるとは意法ハ高の母とあり討めたり
はまよるとは意法ハ高の母とあり討めたり

信忠ハ素城

神無月
の神無月
の神無月

同

一説に七人も安執の
才く無人の礼見は
やあゆむやとて
りしとあも又其人
のひてこそ千の
深もきくしり
西の方合て遊
ちや

仍由はく書と陽書ら下且新の世
有る立痛日朝雲朝為初雲書著た約
と山岩乃ほみはあり又此由乃物あり
ふりしら極のありありあくはれより
しは形力乃書しそあわく免と也何
既免とふ本とありあふふいはり
とちり

古今真名序風流如野宰相輕情如細言

今大中納云ヲナケント云
行平バカリダフゲント云

其時代二納云云行平

中納云約平 系圖業平ノ取在

古今離別
改

あはれきまの山乃麓よまふねらうさくさくさりむ
いあはら山あはれ又因情あまありい

受領一任四ヶ年

三ノ次

鄧侯指

謝令推不去

右晋書鄧侯傳在

吾分ハ今の命又今の
唐とんゆ

てとありあく一此年一後漢之乃あまあり
くまのさくも終くはゆと今あはれん
とひあく一まとさるむ世まふま候
とれらとありあく終立りあくとま
とふ人まはあもあはれんとさりあ

ふとかく續

あ

建通治流をまこの命を彼書に
をれ心外とららしけい
初まよち成あ
あしとま
事し
同日者之
たろ知
く
あ

たはとあ人よ
こたろと
八

一説は七人も其鉄の
牙く無人九礼見式雲
や御他りやせしふらう
りしと部を又去人
のひして子万の
流しきくしりな
西の方合て遊子れり
也

約由の書と陽基を二下旦新の世
有る立宿曰朝雲朝為初雲書者約
と山谷乃ほみはあり又此面乃物あり
ふううら海ありありありありあり
し三は形見乃書しそありありあり
約免とふ本とありありありありあり

古今真名序風流如野宰相輕情如
今大中納云ヲオケント云
行子バカリゲフデント云
其時代ニ納云云ハ行中
系圖業平ノ取在

中納云約平
約免とふ本の山乃麓は生家ねり
いありり山家流又因情由はあり

受領一任四ヶ年
次ニ

鄧侯指
謝念推不去
右晋書鄧侯傳在

疾句ハ今の命又今の
磨とわゆ
彼と同掃守の
任して勢のゆ
又飛せてもまの人のま

費之

て色ありあり
くまりありあり
とひありあり
らわらありあり
とふ人ありあり
さありあり
とありありありありありありあり

細書
離別
子らはたに
りらるる

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or document fragment. The text is written on a small, rectangular piece of paper with a yellowish tint, placed on a larger, light-colored background. The script is dense and appears to be a mix of letters and symbols, possibly representing a specific dialect or a shorthand system. The text is arranged in several lines, with some characters appearing to be stylized or abbreviated. The overall appearance is that of a historical or archival document.

ひつりてあつて
世もあつて
ひつりてあつて
世もあつて

とらふてい遠き
又中位後小
シゲキガモト
於遠小サ之
さの小

八百五十一
字又部
とそ
あふ

行年

わろそ
細書
まは
わく

まき

沖抄 天徳日

照大神方三子
正三代孫菅原清
孫冬後位三位是善子也母伴氏

菅家

古今群詠

初年
向山
好ひ

い
足
始
た
ま
弟
さ
お

ぬののあきははけはたりもゆるおたると

あ利

紙後遇風耐中、美色、無濡量

水生風熟布帆新、只刃と程、不見ま

擦ハラス

産被百花擦乱、比来天地一雨人、け約るを河使され、おねと云他之の約也

まのりちんしんまのりちんしん

罪深の海人若火たるは若かりてすろふ神の境ろく

道火くあまの家小若かりてあをいれらるは

とりのよ免りも海とはあろあくはらふ

中まそわとあられとあひ合てぬる袖ありと

ふありすい若乃海鏡をれさつふあを

まろとま

このと秀白いあや、殊小ア仔細

後成

世の定家アフミハ体トハリ、紙注、波モト云キシハ三ト下ニ珠掛

三海かゝるとまてと、松浦や小浦のまもや、波あつた

松島奥初の名もや、那方面白、和志具ま

又もまてまんともや、け及い日と、つる輪を

いさあまともや、あまのいさあま、乃、あまの

あまのまも、なまのり、又あまのり、あまのり

あまのり、あまのり、あまのり、あまのり

紙注、浪小とつら、殊勝、小浦とそつら、八福、松浦や小浦と、小時、清多色

スズメ

ぬののまきははけきたりもむよおたふし

あつめ 祇役遇風耐中 雲色 無濁童

氷生風親布帆敷 只見行程 不見ま

夜被百花撩乱 咲比来天地一困人

けつろんと津伎をれらねと云伝之の坊也

捺 びん びん

後成

巽装 波金若火たるをよ者切りてすろふ神の境ろく水

道はくくあまの家小若らりてあをいあふとほ

とつよは免りとも治とはあふあふくはふふ

中まそわとあをれとあひ合てぬく袖ありと

ふありすい若乃海鏡をれきつふあをを

まろとま

このま秀白いぬや 珠小ア研ゆ

後成

世介 定家 三ツツル体ト三ツリ 祇注

三浦やいそとてとむ 杉浦や小浦のまもや 波あつた

杉島奥初の名ゆや 那志面白 神志具まあ

又もまそまんともや けは日とあつらふ ちる ちる

いさなまそとまもいさなまそとまもいさなまそとまもい

るのちまなまそとまもいさなまそとまもいさなまそとまもい

ゆいけいあつらふとまもいさなまそとまもいさなまそとまもい

祇注 浪小といつら 珠指 小指とてつら 八指く 杉浦や小浦と小指 清る色

たすけあり

[Faint bleed-through text from the reverse side]

[Red handwritten notes]

後京極

[Red handwritten notes]

[Red handwritten notes]

我らひの切なれ... 初めは... 我らひの切なれ... 初めは... 我らひの切なれ... 初めは...

源等

源等

源等

東海のはら... 源等の...

わげと... 源等の... 源等の...

源等

源等

源等

源等

源等

[Red handwritten notes]

源等の... 源等の... 源等の...

かみりのおちのりあはれまゝのよきかみりあはれまゝのちのりあはれ

右のりあはれまゝのちのりあはれ

後成

千載

初五文字少しくいふにせんや二百

いふにせんや二百いふにせんや二百

いふにせんや二百いふにせんや二百

いふにせんや二百いふにせんや二百

いふにせんや二百いふにせんや二百

いふにせんや二百いふにせんや二百

いふにせんや二百いふにせんや二百

いふにせんや二百いふにせんや二百

いふにせんや二百いふにせんや二百

いふにせんや二百いふにせんや二百

いふにせんや二百いふにせんや二百

いふにせんや二百いふにせんや二百

いふにせんや二百いふにせんや二百

いふにせんや二百いふにせんや二百

いふにせんや二百いふにせんや二百

いふにせんや二百いふにせんや二百

いふにせんや二百いふにせんや二百

いふにせんや二百いふにせんや二百

いふにせんや二百いふにせんや二百

いふにせんや二百いふにせんや二百

いふにせんや二百いふにせんや二百

いふにせんや二百いふにせんや二百

いふにせんや二百いふにせんや二百

いふにせんや二百いふにせんや二百

いふにせんや二百いふにせんや二百

左難のうら

右難のうら

左難のうら

右難のうら

左難のうら

右難のうら

左難のうら

右難のうら

左難のうら

右難のうら

左難のうら

右難のうら

左難のうら

右難のうら

左難のうら

右難のうら

左難のうら

右難のうら

左難のうら

右難のうら

左難のうら

右難のうら

左難のうら

右難のうら

左難のうら

右難のうら

左難のうら

右難のうら

ふらうろくし又夕日のおしるふをたけしりき
ゆげとのあまもなす

后撰 仁徳ノ御基布大和物拾不任世ノ有
拾芬抄 寛平法皇ノ御基布云
紹運孫行明親王ノ御任世云

真友 淡雄 家
源隆 三木
三木 藤原 三木 友舟
三木 山内 三木 隆上

あのみきいめ 三つとをゆ 一のつとを
あまのそとにたてしつとをいふとや

ゆののちゆつとく
ゆのちゆつとく
ゆのちゆつとく
ゆのちゆつとく
ゆのちゆつとく
ゆのちゆつとく

あまのそとにたてしつとをいふとや
あまのそとにたてしつとをいふとや
あまのそとにたてしつとをいふとや
あまのそとにたてしつとをいふとや
あまのそとにたてしつとをいふとや
あまのそとにたてしつとをいふとや

あまのそとにたてしつとをいふとや
あまのそとにたてしつとをいふとや
あまのそとにたてしつとをいふとや
あまのそとにたてしつとをいふとや
あまのそとにたてしつとをいふとや
あまのそとにたてしつとをいふとや

あまのそとにたてしつとをいふとや
あまのそとにたてしつとをいふとや
あまのそとにたてしつとをいふとや
あまのそとにたてしつとをいふとや
あまのそとにたてしつとをいふとや
あまのそとにたてしつとをいふとや

後撰 經信心ノ男 白河院 金葉撰者 華葉撰者

ふらうろくし又夕日のおしるふをたけしりき
ゆげとのあまもなす
あまのそとにたてしつとをいふとや
あまのそとにたてしつとをいふとや
あまのそとにたてしつとをいふとや
あまのそとにたてしつとをいふとや

伊勢

後水
之にわの川流をきくは流れはるかにありて清き水

詞云
はるかにありて清き水
比又ありて清き水
男の心ならずも清き水
をせしめんとす
なげなむ

伊勢のたけくらとて
なりとてはるかにありて清き水
とてはるかにありて清き水
とてはるかにありて清き水
とてはるかにありて清き水
とてはるかにありて清き水
とてはるかにありて清き水

目
伊勢のたけくらとて
なりとてはるかにありて清き水

其う
在二首より一向はありて清き水

仙海抄
東心人 日奈紀
はるかにありて清き水

伊勢のたけくらとて
なりとてはるかにありて清き水
とてはるかにありて清き水
とてはるかにありて清き水
とてはるかにありて清き水
とてはるかにありて清き水
とてはるかにありて清き水

和名宇太加太

九

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

後醍醐天皇

...

...

...

新注
三田の海士の袖小吹の歌は凡のうらむこといふは終にまふもさあなり
是七序のうらむこといふは凡のうらむこといふは終にまふもさあなり

後成辨

三田の海士の袖小吹の歌は凡のうらむこといふは終にまふもさあなり
是七序のうらむこといふは凡のうらむこといふは終にまふもさあなり
三田の海士の袖小吹の歌は凡のうらむこといふは終にまふもさあなり
是七序のうらむこといふは凡のうらむこといふは終にまふもさあなり
三田の海士の袖小吹の歌は凡のうらむこといふは終にまふもさあなり
是七序のうらむこといふは凡のうらむこといふは終にまふもさあなり

沖抄、府生木工九忠衛子
作者部類、從五位下安繼子

云生忠次 *右衛門府生*

けふれ名譽にまふこといふは終にまふもさあなり
七三本の時

沖抄、府生木工九忠衛子
作者部類、從五位下安繼子
三田の海士の袖小吹の歌は凡のうらむこといふは終にまふもさあなり
是七序のうらむこといふは凡のうらむこといふは終にまふもさあなり

三田の海士の袖小吹の歌は凡のうらむこといふは終にまふもさあなり
是七序のうらむこといふは凡のうらむこといふは終にまふもさあなり
三田の海士の袖小吹の歌は凡のうらむこといふは終にまふもさあなり
是七序のうらむこといふは凡のうらむこといふは終にまふもさあなり
三田の海士の袖小吹の歌は凡のうらむこといふは終にまふもさあなり
是七序のうらむこといふは凡のうらむこといふは終にまふもさあなり

大板抄

元方
あふしはあふし
のつれなき

けりなかなり
いふもくわ
ふれなきの月

先志抄云
つれなき
半抄

あふぬるゝあふぬるゝのあふぬるゝ今
あふぬるゝあふぬるゝのあふぬるゝ今
あふぬるゝあふぬるゝのあふぬるゝ今
あふぬるゝあふぬるゝのあふぬるゝ今
あふぬるゝあふぬるゝのあふぬるゝ今
あふぬるゝあふぬるゝのあふぬるゝ今
あふぬるゝあふぬるゝのあふぬるゝ今

あふぬるゝあふぬるゝのあふぬるゝ今
あふぬるゝあふぬるゝのあふぬるゝ今
あふぬるゝあふぬるゝのあふぬるゝ今
あふぬるゝあふぬるゝのあふぬるゝ今
あふぬるゝあふぬるゝのあふぬるゝ今
あふぬるゝあふぬるゝのあふぬるゝ今
あふぬるゝあふぬるゝのあふぬるゝ今

あふぬるゝあふぬるゝのあふぬるゝ今
あふぬるゝあふぬるゝのあふぬるゝ今
あふぬるゝあふぬるゝのあふぬるゝ今
あふぬるゝあふぬるゝのあふぬるゝ今
あふぬるゝあふぬるゝのあふぬるゝ今
あふぬるゝあふぬるゝのあふぬるゝ今
あふぬるゝあふぬるゝのあふぬるゝ今

大徳抄

名はうらなひをいふ
ちりやうのり
のりちりやうのり

志に道なきは縁のなきあはれ
眼てつりあはれつねも
色づのさかりはゆきとあはれ
とたひしてあひそめん
送系名にゆきとあはれ
屋探るゆきの目殺あはれ
中ずとあはれ
あの手とあはれ

思出のあはれの時
あはれの時

善住法師

遍昭子 信右玄利
信時

昔今とあはれ

あはれの時
あはれの時

あはれの時とあはれ
あはれの時とあはれ
あはれの時とあはれ
あはれの時とあはれ

あはれの時とあはれ
あはれの時とあはれ

上大夫

陽成後
三兵部

あはれの時とあはれ
あはれの時とあはれ

あはれの時とあはれ
あはれの時とあはれ
あはれの時とあはれ
あはれの時とあはれ

あはれの時とあはれ
あはれの時とあはれ

名うらふちをもち
ちりあつちのね
のうらむちをもち

志に道徳に修養の事ありしかば
眼ていつくめをれり神也なり
色うらむちり修養の事ありしかば
となむしてあひそめん

送柔名にゆまの神楽なり
屋敷のまじりの目敷のまじり

おのすしと蘇見ゆは
おのすしと蘇見ゆは

思出のいふまじり
かかるといふまじり

善住法師

遍昭子 信名玄利 信時

吾今んとゆひの月
吾今んとゆひの月

今んとゆひの月
今んとゆひの月

多の月とつりくはふり
秋の月とつりくはふり
と初秋の月とつりくはふり

今のとゆひの月
今のとゆひの月
今のとゆひの月

元良親王

陽成後 宇二

三三
三三

席并也
多の月とつりくはふり
多の月とつりくはふり
多の月とつりくはふり

遠山といふまじり
まの心のまじり
おの心のまじり
おの心のまじり

四條後夜に成り
きりくはし
それの時

相行し守る幸山とまら
わんふつまことと同なり也

太子頭教上人元澄云 仕持統文武之聖朝 上下畧
元永六年二月十六日 禮部大史藤原季常の夢あり人丸の信を以て其影像の撰なりと云 古今集卷六

人丸

万葉
礼部

山崎をのこつら
むつれ後小雄の
つらみりつら
つらみりつら

人丸の影を以て其影像の撰なりと云
古今集卷六
人丸の影を以て其影像の撰なりと云
古今集卷六
人丸の影を以て其影像の撰なりと云
古今集卷六

一服山
なすつらつら
なすつらつら

人丸の影を以て其影像の撰なりと云
古今集卷六
人丸の影を以て其影像の撰なりと云
古今集卷六
人丸の影を以て其影像の撰なりと云
古今集卷六

元良親王

陽成院元一沖子三浦無知也

後撰
元三徳
元三徳

元三徳の影を以て其影像の撰なりと云
古今集卷六
元三徳の影を以て其影像の撰なりと云
古今集卷六
元三徳の影を以て其影像の撰なりと云
古今集卷六

四時夜に成り
きるとは
それの時

相行いふるきよしと
わんふつぎとくに同なり

不孝頭教元人元澄云 仕持統文武之聖朝 上下畧
元永六年六月六日 治理之吏 孫子香の夢り 人丸の信をゆぬ其影像の隈なりし 古今 美カミ六

人丸

万葉
礼毛
山名 毛のこつら
むつし 飯小雄の
つらみりし
つらみりし
つらみりし

三葉
二葉のあまの
はあまの
つらみりし
つらみりし
つらみりし
つらみりし
つらみりし
つらみりし
つらみりし
つらみりし

一級山
名 山名
つらみりし
つらみりし
つらみりし

つらみりし
つらみりし
つらみりし
つらみりし
つらみりし
つらみりし
つらみりし
つらみりし
つらみりし
つらみりし

元康親王
陽成院 一沖子 三浦無別

元康親王

後藤
三徳
つらみりし
つらみりし
つらみりし
つらみりし
つらみりし

つらみりし
つらみりし
つらみりし
つらみりし
つらみりし
つらみりし
つらみりし
つらみりし
つらみりし
つらみりし

多行の島
日本及び唐子

経度緯度
各標記

国史

今將
すしつふんぬるも
まをいささかめ
る

繪

三に候おきよはるに候一に候はるも

御前
御前
御前

園

御前

吾我熱心はる村候

御前
御前
御前

御前
御前
御前

御前
御前
御前

御前
御前
御前

御前
御前
御前

御前
御前
御前

御前
御前
御前

御前
御前
御前

御前
御前
御前

御前
御前
御前

御前

高野山 高野山

終極 終極

国史 国史

今将 今将

今将 今将

今将 今将

今将 今将

今将 今将

今将 今将

今将 今将

今将 今将

今将 今将

今将 今将

今将 今将

今将 今将

今将 今将

今将 今将

今将 今将

今将 今将

今将 今将

今将 今将

今将 今将

今将 今将

今将 今将

今将 今将

今将 今将

時は六朔にわたるに及ぶ

の夜をいそぐまはるわきまをく

といかりそくをくしむ難波の海ありけり

なふりこつつけらるぬおの

綱の曲ま神のすしあり信のまはわら

けりあまや けりあまや

まに候おきよはるに

まに候おきよはるに

まに候おきよはるに

まに候おきよはるに

まに候おきよはるに

まに候おきよはるに

まに候おきよはるに

まに候おきよはるに

まに候おきよはるに

まに候おきよはるに

まに候おきよはるに

まに候おきよはるに

まに候おきよはるに

まに候おきよはるに

まに候おきよはるに

まに候おきよはるに

まに候おきよはるに

まに候おきよはるに

まに候おきよはるに

の形の中、ゆくは曲もまた...

もくちなまのりな枯れゆくはりなり花のまじり
あはれ物や可憐なりとてわらふは御すつとて

*人々の心は花のまじりなりとてわらふは御すつとて
あはれ物や可憐なりとてわらふは御すつとて*

後鳥羽院

無四神

の心の中、ゆくは曲もまた...

あはれ物や可憐なりとてわらふは御すつとて

あはれ物や可憐なりとてわらふは御すつとて

あはれ物や可憐なりとてわらふは御すつとて

あはれ物や可憐なりとてわらふは御すつとて

あはれ物や可憐なりとてわらふは御すつとて

あはれ物や可憐なりとてわらふは御すつとて

あはれ物や可憐なりとてわらふは御すつとて

あはれ物や可憐なりとてわらふは御すつとて

心遣り塊轉

後同前也
本は中ね未だして二言

あゝくさくさくー

元捕 後五位上肥後守 海軍大臣孫殿忠子

能因被松

未松未松と云ふ
未松と云ふ浪のこも
面より下りて

あゝくさくさくー

わいーわいーのま
わいーわいーのま
わいーわいーのま

あゝくさくさくー

あゝくさくさくー

真 下北面
俗名別清
法名曰徳
大寶坊

登勢けとほや物と魚と

あゝくさくさくー

あはれなる神の御心

後撰、者

元浦

後五位上 肥後守 藤原長子

善哉と云ふ所の神と云ふ所の末の松尾清盛

能因致松

未だ松尾清盛が
未だ松尾清盛が
未だ松尾清盛が
未だ松尾清盛が

あはれなる神の御心

あはれなる神の御心

あはれなる神の御心

あはれなる神の御心

あはれなる神の御心

あはれなる神の御心

あはれなる神の御心

あはれなる神の御心

あはれなる神の御心

下北面

俗名別清

法名曰徳

あはれなる神の御心

あはれなる神の御心

あはれなる神の御心

あはれなる神の御心

あはれなる神の御心

あはれなる神の御心

天正十四曆八月廿日

丹山陽

右一冊總志前以相公以思本可也
寫之孤隨之松抄得也云其志
濟祝行教之其得年功應是令終也
新詩(寫)結耳

天正十六年十二月廿日 二位下玄旨

此少一違 天應以三條時林 實條類

書之之間色款之云又云 卷者

覽中書卷者八名宮而之松院未許書之
多松系下之河松類 觀或至思之亦非
顧觀之其得始如松之了若何師
抄之者下得道之真如卷之筆下何事
抄之云一抄部之其由卷也

時文祿十歲五名上衛

注京玄旨

八月廿日京玄旨

此抄書之志亦云也 秘市也然亦之
與法熟而之 信之亦之書家
新抄亦之也

五高天孫...

...

...

中流通船之所 新次 卷之二 戊申書 并長伯律法 同書 以書入年

享保二十年二月

寬文八 戊申歲 終冬吉日

風月夜在陽門刻

右書入并別二卷 元... 一 丁辰六月書寫

